

発達障がい児の年齢別ニーズに合わせたペアレント・トレーニング

保護者発言分析からの考察

著者名：大阪市発達障がい者支援センター 瀬崎 由佳

キーワード：ペアレント・トレーニング、ファシリテーター、発達障がい児、発達段階

要旨

発達障がい児を養育する保護者は、子育ての中で様々な不安や困難に直面しやすく、育児ストレスが高いと言われており、家族支援の重要性が指摘されている。ペアレント・トレーニング（以下、PT）は発達障がい施策の家族支援の重要なメニューの一つに位置付けられており、保護者が子どもの行動を理解し、具体的な養育スキルを習得する心理教育的アプローチである。大阪市発達障がい者支援センター（以下、当センター）では、平成25年度よりグループ形式のPTを実施しており、現在は幼児・小学校低学年・小学校高学年・中学校と、年代別にグループ編成をし、参加者がその年代に共通の課題に取り組みやすい体制を整えている。令和5～6年度に実施した各年代の10グループ（合計63人）に参加する保護者の発言内容を記録し、質的に分析することで、発達段階に応じた保護者の興味や関心の変化、課題等を報告する。また、明らかになった課題をふまえて、PTのファシリテーターとして必要とされる視点に言及する。

1 はじめに

発達障がい児を養育する保護者は、日常の子育ての中で様々な不安や困難に直面しやすく、育児ストレスが高いことは広く知られている。子どもの発達障がい特性に関連した養育上の困難によって、育児負担感が増し、保護者の精神的な健康状態にも大きな影響を与えていている。発達障がい児本人への支援に加え、養育する保護者への支援の重要性が指摘される中、当センターでは平成25年度よりPTを取り組んでいる。PTは、厚生労働省が推奨する家族支援施策の1つに位置づけられており、行動療法をベースに子どもの特徴にあわせた養育方法に関する知識や技術を習得するためのものである。これは1970年代からアメリカを中心に発展し、その後、日本でも様々な形で取り入れられるようになった¹⁾。PTの重要な目的として、「子どもが不適応行動をする→保護者が子どもを怒る→子どもは反発したり意欲を喪失して不適応行動が増す→さらに怒る」という親子関係の悪循環を断ち切り、よりよい親子関係を築くことがあげられている。実際、PTにスタッフとして参加していると、効果に個人差はあるものの、講座の回数を重ねるごとに親の表情が明るくなったり、前向きな発言が増えたりすることを経験する。これまでの研究においても、PTは、親の養育スキルの向上、ストレスの低減、子どもの適応的な行動の獲得、問題行動の改善に効果があることが明らかになっている²⁾。

当センターでは、平成25年度よりグループ形式のPTを実施しており、現在は幼児・小学校低学年・小学校高学年・中学校と、年代別にグループ編成をし、参加者がその年代に共通の課題に取り組みやすい体制を整えている。PTを実施する自治体や医療機関、発達支援機関などが増加しているが、幼児や低学年の子の親を対象としていることが多く、思春期の子の親を対象としていることは少ない。当センターのPT参加者の中には、幼児期や低学年のPTに参加後、高学年や中学生になって、「今までの関わり方では上手くいかない」「思春期の子どもへの関わり方を学びたい」と、再度参加する人もいる。子どもの発達段階によって、親子の関係性が変化することから、PTに対する親のニーズも変化すると思われる。親のニーズに応えられる質の高いPTを実施するには、ファシリテーターが、それぞれの発達段階で課題となることを把握しておくことが重要となる。本稿では、PTのセッション中の親の発言内容を質的に分析することで、発達段階に応じた保護者の興味や関心の変化、課題等を報告する。また、明らかになった課題をふまえて、PTのファシリテーターとして必要とされる視点について言及する。

2 方法

(1) 分析対象者

令和5年5月～令和6年10月にかけて当センターで実施したPTに参加した10グループの保護者を対象とした。参加者は、大阪市内在住で、自閉スペクトラム症や注意欠如多動症等の発達障がいの診断がある、或いは、疑いのある子どもを育てる保護者である。当センターが、ホームページやLINE公式アカウント、大阪市福祉局発達障がい者支援室、区の子育て支援室を通して募集した。

PT参加者には、書面と口頭で調査の目的を説明し、66人のうち、63人からインフォームドコンセントを得た。幼児期（年少～年長）3グループ18人、小学校低学年（小学1年～小学3年）3グループ19人、小学校高学年（小学4年～小学6年）3グループ20人、中学校（中学1年～3年）1グループ6人、合計10グループ63人が分析の対象者となった。グループ数と参加人数を表1に示す。

表1 分析対象となるグループ数と参加人数

	グループ数	人数
幼児	3	18人
低学年	3	19人
高学年	3	20人
中学校	1	6人
合計	10	63人

(2) プログラム内容

幼児期のグループは、一般社団法人日本発達障害ネットワーク（以下、JDDnet）が作成した「ペアレント・トレーニング実施ガイドブック²⁾」の基本プラットフォームに基づき、当センターで幼児用にアレンジした6回連続のプログラムを使用した。幼児版プログラムの内容を表2に示す。ファシリテーターは、JDDnetが作成した「ペアレント・トレーニング支援者用マニュアル³⁾」を参考にプログラムを実施した。

表2 幼児版プログラム内容

1回目	オリエンテーション
2回目	ほめ上手、行動観察と3つのタイプ分け
3回目	行動のしくみ
4回目	行動のしくみ、達成しやすい指示の出し方
5回目	環境調整、ほめるために待つ
6回目	目標をたてる、まとめ

低学年と高学年は、奈良式の10回連続のプログラム、中学校は奈良式の9回連続のプログラムを使用した。奈良式のプログラム内容を表3に示す。

プログラムは、基本的に隔週で、1セッションは2時間で実施した。低学年・高学年・中学校のPTは、学校の夏休みや冬休みの期間は休みとした。

スタッフは、ファシリテーター1名とサブスタッフ1名の、2名体制とした。

表3 奈良式プログラム内容

1回目	オリエンテーション
2回目	子どもの行動の観察と理解
3回目	子どもの行動への良い注目の仕方
4回目	親子タイムと良い所探し
5回目	前半のふりかえりと上手なほめ方
6回目	従いやすい指示の出し方
7回目	無視の仕方
8回目	トークンとリミットセッティング
9回目	タイムアウトと後半まとめ
10回目	全体のまとめ

(3) 調査・分析方法

参加者の発言内容を記載するための記録シートを作成し、計5名のサブスタッフが記録した。サブスタッフは、発達障がい児者への支援やPTのサブスタッフとしての経験が5年以上あり、公認心理師、臨床心理士、社会福祉士、保育士等の資格を有していた。サブスタッフには、事前に調査の目的を説明し、プレセッションとして実際に記録をとつて、記録すべき視点等を確認した。

記録を元に、PTの進行に伴う参加者の継時的な変化について質的にデータ分析をすると共に、どのような話題が出たかを分類し、各年代の特徴を整理した。PTで出てくる話題は、日常生活での親子の関わりとなるため、ライフスキルに関する事柄が多くなる。ライフスキルに関しては、世界保健機構（WHO）が学生のライフスキルとして10項目（意思決定、問題解決、創造的な思考、批判的な思考、効果的なコミュニケーション、対人関係のスキル、自己認識、共感性、感情への対処、ストレスへの対処）をあげている⁴⁾。また、梅永⁵⁾は、発達障がいの子のライフスキルとして、10項目（身だしなみ、健康管理、住まい、金銭管理、進路選択、外出、対人関係、余暇、地域参加、法的な問題）をあげている。WHOと梅永のライフスキルの項目を参考に、話題の分類を行った。

3 結果

分析した結果を、「参加者の特徴」「ニーズ」「話題」「効果」の4つの項目でまとめたものを表4に示す。

参加者は、子育てにおいて様々な困り事を経験し、PTに申し込んでくる。「子どもの行動が理解できない」「怒らずに対応できるようになりたい」「他の人

表4 PT参加者の発言内容

	幼児	低学年(小1~3年)	高学年(小4~6年)	中学校(中1~3年)
参加者の特徴	子どもと一緒に行動する機会が多く「親である私が何とかしなければ」という思いから、怒る子育てとなる傾向がある。親としての役割を上手くはたせずに挫折し、自信を喪失した状態で、焦りや危機感を抱いている。	同年代の子が一人で行動する機会が増える中、我が子は未だ親のサポートが必要な場合が多いため、誰にも分ってもらえないという孤独感を抱きやすい。就学を機に「宿題をやらせないといけない」というプレッシャーが強まり、宿題に関する話題が多くみられた。ただ、日々の生活の維持で精一杯な状況では、宿題の話題は減少した。	不登校や登校しづりが増え、これまでの自身の子育てに不全感を抱きやすい。子ども同士のコミュニケーションが複雑になってくる年代であるため、子ども自身が集団の中で適応できるための生活習慣や社会性を最低限身に着けてほしいという切実な願いを持っている。一方で、子ができるここまで干渉してしまう傾向がみられた。	子どもが社会に出てやっていけるのかという不安が顕在化しやすい。思春期特有の精神面の不安定さに加えて、学業成績で評価にさらされる、不登校の長期化、などの影響で、親子間のコミュニケーションが減少したり、高圧的で指示的な会話が見られた。持ち物や時間の管理能力が求められることとなり、親がどの程度介入するべきか迷う姿がみられた。
ニーズ	「親として子どもを受け止めたい」「上手く関わる」	「子どもを理解できるようになりたい」「子どもを支えられる親になりたい」	「子どもの気持ちを知りたい」「子との関係を改善したい」	「思春期に応じたかかわり方を学びたい」
話題	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活動作：身辺の自立にむけ、トイレ・着替え・食事など、できない事を出来るよう教えていく関わりが主となる。 ・生活習慣：起床や就寝、一連の流れ（登園準備、帰宅後、入浴、等）がスムーズにいかない話題が頻発。ゲームや動画の止めさせ方や家庭内でのルールの話題も多い。 ・地域参加：スーパーや公園、電車など、公共の場での振る舞いに関する話題も出る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校：子どもに宿題をやらせる為の関わりに苦悩しており、宿題に関する話題が目立つ。 ・家族関係：参加者のパートナーに関する話題もあがり、PTに参加して変わりつゝある自分と変わらないパートナーとの関係性が出やすい。 ・生活習慣：起床や就寝、一連の流れ（登校準備、帰宅後、入浴、食事、等）がスムーズにいかない話題が頻発。ゲームや動画の止めさせ方や家庭内でのルールの話題も多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校：学習に関する工夫が話題に出る。不登校や登校渋りに関する話題が増える。 ・家族関係：母子関係を表す話題が増える。 ・自己管理：身だしなみや時間管理（家を出る時間に間に合わない等）に関する話題がでる。 ・地域参加：一人や友人との外出が増え、バスや電車での移動、門限が話題に上がる。 ・意思決定/問題解決：子ども自身が周囲に自分の意思を伝えたり、問題を解決する事に関する話題が増える 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校：不登校の長期化、定期テストや課題提出に関する話題が目立つ。 ・家族関係：親への反抗的な態度や、部屋に籠る、暴言等、思春期特有の問題がでてくる。 ・自己管理：持ち物や提出物の管理、定期テストや提出物に向けた計画に関する話題が増える。 ・意思決定/問題解決：親の制限を減らし、子どもに任せる事柄が増えた。 ・進路：進路の選択、子どもの高校に関する態度、学校見学や面接等。
PT効果	<ul style="list-style-type: none"> ・「ピアサポートを得たり、ファシリテーターから安心感を得る」→「養育行動が変化する」→「子どもの行動や親子の関係性が変化する」という流れで効果が表れた。 ・日々の生活の維持で精一杯な状況では、「養育行動の変化→子や親子の関係性の変化」より、参加者の安心感の醸成やピアサポートを得ることが主となる傾向があった。 	<p>子どもへの肯定的な理解と対応をとれるようになるが、「保護者自身が子への関わり方を変えたいという希望を持っている」参加者の効果が早く現れ、「子どもの行動が変わってほしいという期待が強い」参加者は効果が遅れて現れた。</p>	<p>子どもの精神的な成長に伴い、子どもの意思や自主性を育む姿勢が見出された。しかし、保護者が「こうあるべき」と期待する子ども像を求める気持ちが強いと、子どもの行動上の「できた/できない」に注目がいき、子の内面にまで関心が及ばない傾向があった。</p>	<p>子どもとの適切な心理的距離を模索し、子どもの意思を尊重するようになった。将来の不安を抱えながらも、今できることに取り組む意欲がでた。子の意思を尊重しつつ、苦手な所をサポートする姿勢が見られるようになった。</p>

たちがどの様に対応してゐるか知りたい」等、今の子育てが少しでも上手くいく方法を求めてゐる。幼児や小学校低学年の時期は、親子の間のやりとりや、家庭内で扱える話題が中心であるが、高学年や中学校になると、子どもの成長にともない、学校を中心とした社会との関わりの中で子ども自身が取り組む課題が増えてきた。PTに参加することで、参加者たちは「ピアサポートを得たり、ファシリテーターの関わりによって安心してPTに参加するようになる」→「養育行動が変化する」→「子どもの行動や親子の関係性が変化する」という順序で変化した。しかし、日々の生活を維持することで精一杯な状況では、「養育行動の変化」「子の行動や親子の関係性の変化」といった効果が表れにくく、参加者の安心感の醸成やピアサポートを得ることが主となる傾向があった。子どもから家族への暴言・暴力が目立つ、夫婦間・兄弟間・親子間の家族関係が悪化している、参加者自身に何らかの精神症状を抱えている等で、新しい養育方法を試みる余裕がない場合は、PTの効果は限定的であった。

以下に、年代別に特徴を整理する。

(1) 幼児

家庭内では日常の生活動作を教えたり、外出する際には親子一緒に機会が多く、常に子どもと居るため、「親である私が何とかしなければ」という思いから、怒る子育てとなる傾向がある。同年代の子に比べて、わが子の出来ない所に目が行って、「躾なければ」「教えなければ」という思いが強いが、親としての役割を上手くはたせずに自信を喪失した状態で、焦りや危機感を抱いている。

PT内で出てくる話題としては、身辺の自立にむけ、トイレットトレーニング、着替え、食事、入浴方法など、まだできない事を出来るよう教えていく関わりが多かった。また、起床や就寝、一連の流れ（登園準備、帰宅後、入浴、食事等）がスムーズにいかない、といった生活習慣に関する話題も頻発している。ゲームや動画の止めさせ方や家庭内でのタブレットやゲーム機使用をめぐるルールの話題も多い。一緒に外出する機会が多いため、園の送迎、スーパーや公園、電車など、公共の場での振る舞いに関する話題も出る。

自信を喪失し、焦りや危機感を抱いてPTに参加した親は、受講したことで、落ち着いて客観的に子どもをみれるようになり、感情的にならない対応ができるようになった。

(2) 低学年

同年代の子が一人で行動する機会が増える中、我が子は未だ親のサポートが必要な場合が多いため、誰にも分かってもらえないという孤独感を抱きやすい。就学を機に「宿題をやらせないといけない」というプレッシャーが強まり、保護者の関心が学習に向かうことが多い時期であり、宿題に関する話題が多くみられた。しかし、知的障がいを併せ持ち特別支援教室に在籍している場合、不登校となつてゐる場合や日々の生活を維持することで精一杯で余裕のない状態の場合は、宿題の話題が減少した。

PT内で出てくる話題としては、子どもに宿題をやらせる為の関わり方に苦悩しており、宿題に関する話題が目立つた。宿題にとりかからない、集中力が続かない、間違いを修正しようとすると怒る、綺麗な字を書く事にこだわって宿題が進まない、等である。放課後等デイサービスが宿題をする場として受け皿となる例も多くあった。

家族関係では、参加者のパートナーに関して、自分はPTに参加して子どもへの対応方法が変わってきてるが、パートナーは変わらないし、子どもへの理解がない、という話題があがつた。起床や就寝、一連の流れ（登校準備、帰宅後、入浴、食事等）がスムーズにいかない、といった話題や、ゲームや動画の止めさせ方や家庭内でのタブレットやゲーム機使用をめぐるルールの話題も多い。

PTを受講して、子どもへの肯定的な理解と対応をとれるようになる親は多いが、「保護者自身が子への関わり方を変えたい」という希望を持っている。参加者の効果が早く現れ、「子どもの行動が変わってほしい」という期待が強い。参加者は効果が遅れて現れた。

(3) 高学年

不登校や登校しぶりが増え、これまでの自身の子育てに不全感を抱きやすい。親が仕事を辞めた等、子どものために親自身の自己実現を犠牲にしたと感じた場合や、転校した、習い事や放課後等デイサービスに通つた等、時間や金銭・労力を多く費やす等したにも関わらず、子どもが不適応をおこしている場合には、親の不全感はさらに強まる。また、子どもも同士のコミュニケーションが複雑になってくる年代であるため、子ども自身が集団の中で適応できるための生活習慣や社会性を最低限身に着けてほしいという切実な願いを持っている。一方で、親子関係が固着してしまい、子は日々成長しているに

も関わらず、子ができるまで干渉してしまう傾向もみられた。

PT 内で出てくる話題としては、低学年に比べて宿題に関する話題が減り、学習に関する工夫が話題に出る。マルチメディアディジタル教科書の使用など、子どもが学習に取り組みやすい工夫をしていた。不登校や登校渋りに関する話題は、低学年に比べて増えていた。家族関係では、低学年に比べてパートナーへの言及は減るが、母子関係を表す話題が増えた。いつまで一緒に風呂に入るべきか、親がつらい時に子が慰めてくれた等、母子の密な関係性がでてきた。身だしなみや時間管理など自己管理に関する話題も目立った。同じ「登校する時間に間に合わない」という話題であっても、幼児・低学年の時期では、「親が声かけしても、登校するまでの流れがスムーズにいかない」といった、生活習慣が身についていないという文脈で語られることが多いが、高学年・中学校の時期になると、「子どもが、家を出るべき時間に間に合う様に準備できない」というように、自己管理の苦手さという文脈で語られるようになっていた。また、高学年になると、親から離れて一人での外出や友人との外出が増え、バスや電車での移動、門限が話題に上がっていた。また、子どもも同士のコミュニケーションが複雑になってくる年代となり、子ども自身が周囲に自分の意思を伝えたり、問題を解決する事に関する話題が増えていた。これらは、クラスメートとのトラブルや、修学旅行などのイベントを契機に出てくる傾向にあった。

PT のセッションが進むにつれ、子ども自身の気持ちの表現や、問題を解決しようとする気持ちを後押しし、サポートする話題が出てきた。子どもの精神的な成長のペースにあわせて、子どもの意思や自主性を育もうとする姿勢が見出されていた。しかし、保護者が子どもに「こうあるべき」と期待する気持ちが強いと、子どもの行動上の「できた/できない」に注目がいきがちとなり、子の内面にまで関心が及ばない傾向があった。

(4) 中学校

義務教育が終わる時期が視野に入ってくる中学校年代では、子どもが社会に出てやっていけるのかという不安が顕在化しやすい。これまでの経験から、子の失敗を心配して先回りした対処したり、「言ってもやらない」と、諦めて子どもに必要な事を言わなくなったりしていた。思春期特有の精神面の不安定さに加えて、学業成績で評価にさらされる、不登校の長期化、などの影響で、親子間のコミュニケーション

が減少したり、高圧的で指示的な会話が見られた。課題物の提出や定期テストへの対策など、子どもも自身に持ち物や時間の管理能力が求められることが増え、親がどの程度介入するべきか迷う姿がみられた。小学校の延長で親が全て管理する家庭、中学入学を期に子どもに全てを任せてしまい、子どもが管理できなくなる家庭、子どものできない部分をサポートする家庭など様々であった。

PT 内で出てくる話題として、学校関係では、不登校の長期化や、定期テスト、課題提出が目立つようになる。不登校の長期化により、人間関係が家庭内のものとなり、親子ともに精神的に疲弊している様子が語られることが多かった。登校している家庭は、定期テストや課題提出に関する話題が目立つ。受験を意識するようになるため、テストの点数が思う様に取れない、提出物を提出できないなどの話が聞かれた。家族関係では、思春期特有の問題がでてきて、親への反抗的な態度がみられたり、部屋に籠る、部屋に入るだけで怒る、暴言、会話の減少等があった。

高学年に続き、自己管理の話題もあがり、持ち物や提出物の管理、定期テストに向けた勉強の計画に関する話題が増える。意思決定と問題解決では、親の関与や制限を減らし、子どもに任せる事柄が増えている。高学年では、トラブルやイベントを契機に問題解決の話題があがることがあったが、中学校では日常生活の中で、子どもの意思を尊重した問題解決のあり方が話題にあがっていた。また、高校受験にむけて、進路の選択、子どもの高校に関する関心や態度、学校見学や面接等、進路に関する話題も中学3年生を中心にみられた。

PT が進むと、親は子どもとの適切な心理的距離を模索し、子どもの意思を尊重するようになっていった。将来の不安を抱えながらも、今できることに取り組む意欲がでてきて、子の意思を尊重しつつ、苦手な所をサポートする姿勢が見られるようになつた。

4 考察

幼児・低学年・高学年・中学校の PT セッション内の参加者の発言内容を分析することで、各年代毎の特徴と課題があることが明らかになった。発達段階に応じた課題をふまえ、PT のファシリテーターに求められる視点と具体的なファシリテーションを表5に示す。

幼児では、親子が一緒に行動する機会が多く、日常生活動作を教え、生活習慣を整え、公共の場での振舞い方を教えることが多くなる。周囲と比べて、

表5 ファシリテーターに求められる視点

	幼児	低学年	高学年	中学校
ファシリテーターに求められる視点	親としての自信を回復する	親が対応を変える必要性を認識する	子の自主性を育む	子の意思を尊重する
具体的なファシリテーション	<ul style="list-style-type: none"> ・親へのねぎらいと受容的な態度 ・努力していることへの注目 ・ピアサポートが強化されるワーク 	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭での実践の促し ・親の変化に積極的な注目 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域リソースの活用と外部連携への動機づけ ・親子の会話を促進させるワーク 	

我が子には出来ない事が多く、親としての関わりに自信を無くしている保護者に対して、「親としての自信を回復する」ファシリテートが求められる。

低学年では、学校の登下校など、親から離れて子ども達だけで行動したり、身の回りの事を親の手を借りずに行うことが増える年代となる。発達障がい児は未だに親のサポートが必要な場合が多く、親は誰にも気持ちを分かってもらえない孤独感を抱きやすい。これまでのサポートの仕方で上手くいかないことが多く困惑している保護者に対して、「親が対応を変える必要性を認識する」ファシリテートが求められる。

高学年では、子ども同士のコミュニケーションが複雑になり、不登校も増えてくる年代である。親は、子ども自身が集団のなかで適応できるための生活習慣や社会性を最低限身に着けてほしいという切実な願いを持っている。子ども自身の自己管理能力や問題解決力を育てていくために、「子の自主性を育む」ファシリテートが求められる。

中学校では、個人差は大きいが、思春期特有の大人への反抗的な態度や精神面の不安定さ、学業成績の評価の厳しさ等から、親子の円滑なコミュニケーションが難しくなる年代である。親の関与が減少するなか、子ども自身に物や時間を自己管理し、問題解決することが求められることとなる。子どもが試行錯誤しながらそれらの課題に取り組むことを、親がサポートするために、「子の意思を尊重する」ファシリテートが求められる。

幼児・低学年は、親主導で子どもに関わる機会が多く、子どもが比較的素直に従う年代であり、PTに出てくる話題も家庭内で取り組みやすい話題である。幼児期には、「親としての自信を回復する」ために、ファシリテーターは受容的でピアサポー

トの効果が強まるような、ペアワークやグループワークを積極的に取り入れ、参加者へのねぎらいと、努力している事への温かい注目を意識すると良いだろう。低学年は、「親が対応を変える必要性を認識する」ために、講座の内容を家庭で実践するように促して、親の変化を積極的に褒めていくと効果的だと思われる。

高学年・中学校は、親の関与を徐々に減らして子どもも主体に移行していく年代となり、PTで出てくる話題は、学校を中心とした社会との関わりの中で子ども自身が取り組む課題に関するものが増えてくる。子どもの精神面の発達の個人差や性格の違いも大きくなってくる。子どもの状況にあわせて、地域リソースの活用や、外部連携の視点をもち、親がコーディネーターの役割を担う事も検討したい。あわせて、「子どもの自主性を育む」「子どもの意思を尊重する」ために親子の対話を促進させるようなワーク等を検討することも良いだろう。

ファシリテーターは、PTには限界があることも自覚をもっている必要がある。PTは、最終的には子どもの行動変容を目的としたプログラムである²⁾が、本調査では、安心感やピアサポートを得るに留まるなど、PTの効果が限定的であった参加者がいた。また、夫婦間・兄弟間・親子間の家族関係が悪化している、子どもや参加者自身に何らかの精神症状を抱えている、不登校の長期化等、PTでは解決できない問題を抱えている参加者もみられた。効果が限定的であった親や、PTで解決できない問題を抱える親へのフォローアップとして、PT終了後の継続的な相談や、専門家へのリファーも求められる。

5 おわりに

発達障がい児を養育する保護者は、日常の子育ての中で様々な不安や困難に直面しやすく、育児ストレスが高いことは広く知られている。発達障がい児への直接的な支援だけでなく、家族への支援の重要性が強調されるようになってきており、PTは家族支援のメニューの一つとして、身近な地域で受けられることが望まれている。しかし、PTの導入が十分に進まない現状があり、その大きな理由として、「実施できる専門人材の不足」が挙げられている⁶⁾。ファシリテーター養成が重要な課題となるなか、当センターでは、ファシリテーター養成講座を令和5年度から実施している。講座参加者からは、PT導入方法の質問に加えて、ワークや宿題の実施が困難な参加者への対応方法や、思春期にどの様な特徴があるかなど、実際にPTをしたときに想定される問題への対応の具体策を知りたいという希望も多かった。ファシリテーターが安心してPTを実施し、かつ、質の高さを担保するには、PTに参加する親の興味や関心が子どもの年齢によって、どのように変化するのか、どんな課題があるのかを把握し、そこに対応できるように備えることは重要である。今後は、当センターで培ってきた知見をさらに活用し、より具体的なファシリテーションのあり方について検討を重ね、身近な地域でPTを受けられる地域体制の構築に寄与したい。

参考・引用文献

- 1) 岩坂英巳編：ペアレント・トレーニングガイドブック,1版,じほう,東京,2012
- 2) 一般社団法人日本発達障害ネットワーク JDDnet 事業委員会：ペアレント・トレーニング実践ガイドブック,令和元年度障害者総合福祉推進事業,2020
- 3) 一般社団法人日本発達障害ネットワーク JDDnet 事業委員会：ペアレント・トレーニング支援者用マニュアル, 令和2年度障害者総合福祉推進事業,2021
- 4) WHO 編: WHO ライフスキル教育プログラム, 川畠徹朗・西岡伸紀・高石昌弘・石川哲也 監訳, 大修館書店,東京,1997
- 5) 梅永雄二：15歳までに始めたい！発達障害の子のライフスキル・トレーニング,1版,講談社,東京,2015
- 6) 井上雅彦・山口穂菜美：発達障害に対するペアレント・トレーニングの地域実装と課題, 発達障害研究 45 (3) 240-249,2023

謝辞

本研究にご協力いただきましたペアレント・トレーニング参加者の皆様、そして、分析にあたり多大なるご指導をいただきました元兵庫医科大学准教授の有吉先生、皆様に心から感謝申し上げます。